

浜松圏

日本の生活、教育に意見

静081012(日)p.17

静岡文芸大 ブラジル人ら80人参加

県内初 ポルトガル語で熱く

浜松市中区の静岡文化芸術大で十一日、地域に住むブラジル人がポルトガル語で参加する討論会(同大、県、大学ネットワーク静岡主催)が開かれた。日系ブラジル人にかかわる課題を話し合うシンポジウムは数多く行われているが、ポルトガル語の討論会は県内初、全国的にも先進的な取り組み。



ポルトガル語の討論会で熱心に意見を述べる参加者。浜松市中区の静岡文化芸術大

一般市民やブラジル人学校経営者、研究者ら約八十人が集まり、同大のイシカワ・エウニセ・アケミ准教授と池上重弘教授らが二年前に実施した同市のブラジル人生活・就労実態調査について報告。アンジェロ・イシ武蔵大准教授が労働、教育などのテーマを投げ掛けて討論会が始まると、参加者が次々と手を上げて会場は熱気に包まれた。日本での生活に関しては、「行政の援助に頼らず行動すべき」「さまざま

まな場面で差別を受けているなどの意見が出た。「ブラジル人の置かれた状況をもっと行政側に理解してもらったため、自分たちから情報発信したい」という意見もあった。参加した同市中区の阿波根アゲライデさん(四七)は「とってもいい機会だった」と笑顔。県多文化共生室勤務の横山マルコスさん(三六)は「日本語では伝えにくいことも多いので、画期的な取り組み」

と評価した。